山梨日日新聞 平成24年10月30日26面掲載 許諾済み

知りたい好奇心

世の中には不思議で分かりづらいことがたくさんあります。自然、科学、歴史など、詳しい先生に解き明かしてもらいましょう。

当たり前じゃない水が使える生活

日本やアメリカなど、先進国といわれる国の人々が1日に使う水の量は、1人300リットルほどといわれています。これは風呂おけ1杯分くらいです。私たちは、風呂、水洗トイレ、洗濯、炊事などに不自由なく水を使っているため、その量を意識することはありません。しかし、世界には、1人1日25リットルくらいの水で生活している人たちもたくさんいます。

不自由な暮らし

それはどんな人たちでしょう。まず、水そのものがない所に住んでいる人たちです。泉や川など水がたくさんある場所が遠ければ、毎日時間をかけて水くみに出かけなければなりませんから、少しずつ大切に水を使います。

次は、水があっても生活に使える水が少ない人々です。穀物を栽培するのにも、食肉を得る家畜を育てるためにも水は必要です。限られた水しかない場合には、農業に使う水と暮らしに使う水とを上手に分けなければならないのです。また、水が近くの川にたくさん流れていても、その川が深い谷を流れているような場合には、ポンプで水をくみ上げるか、はるか上流から水路を引いてこなければなりません。水路を作る費用やポンプを動かすための電気が十分手に入らない場合には、近くに水はあっても、やはり不自由な暮らしをしなければなりません。

政府の力も必要

一方、人々はそれほど貧しくなくても、政府の力が弱い場合も水に不自由な暮らしを余儀なくされます。写真はネパールの首都カトマンズの雨が降らない季節の共同水場の様子です。カトマンズは、たくさんの共同水場があり、かつては写真にある彫刻が施された水の出口から、いつでもたくさんの水が流れ出ていました。しかし急激に都市化が進み、人口が増加して建物が無計画にたくさん建設されると、共同水場の水があちこちで枯れ始めました。また各家庭には水道の蛇口はありますが、水が来るのは1日数時間でしかありません。電気などエネルギーの確保も不十分なため、きれいな水道水を作るための装置や水道水をパイプで送るためのポンプを動かせないのです。人々は屋根のタンクに水をためたり、飲み水を購入したり、共同水場に出かけたりと、大変苦労して水を確保しなければなりません。

このように世界を眺めてみると、日本のように必要な水が何不自由なく使えるということは、水がたくさんあるということだけではなく、それを安定して使える仕組みを維持できるしっかりした社会があるから、ということがわかります。

（山梨大大学院国際流域環境研究センター＝生命環境学部環境科学科兼任＝教授　風間ふたば）

乾期の共同水場で、バケツにたまる水を待つ少女。糸のように流れる水では、なかなかいっぱいにはなりません　＝ネパール・カトマンズ